

# インドにおけるESDの状況と今後の展開 —ホールスクールアプローチを目指して—

前ムンバイ日本人学校校長

神奈川県横浜市立つづきの丘小学校校長 橋本 匠司

キーワード：在外教育施設、ムンバイ、プログラミング学習、ESD、SDGs

## 1. はじめに

今後世界の労働人口の多くを占めることになるといわれるインド、しかしながらその実態には持続不可能な状況も多く存在する。この国に暮らす子どもたちが意識の変化をもち持続可能な未来を創り上げていく素地を得るために何が必要であるかを考え、インドでの生活の中でその実態を肌で感じながら、テーマに沿った研究を進めていくこととした。

まずは、教育関係の状況を近隣の印日協会、さらにはインド現地校を訪問し、今インドの若者そして学生が何を目指し学んでいるのかを確かめ、日本の教育との比較を交えながら、今後共に生きて行くためにはどんな力が必要であるかを考えていく。また、教育機関のみならず、インドの最大の強みであるIT関連企業についても調査を進めていくこと、さらに日本企業のインドへの進出状況に関しても、情報を多くもちたいと考えた。これから世界の労働人口の多くを占めることになると思われるインド人が進もうとしているところ、そこにいかに日本が関わっていくのか、そしてそれは本当に持続可能な世界への寄与を果たすことができるのかを、自分なりに考えてみた。

実際の研究においては、見たこと・聞いたこと・知ったことをただ単にまとめていくだけではなく、その内容を踏まえつつ、学校教育において、今後何が大切なのか、児童生徒に求められる力とは何なのかを探り、今できることを実際の教育現場において実践、検証する必要がある。そのためには、ホールスクールアプローチを行うことにより、ESD（持続可能な開発のための教育）の視点をより身近なものとし、児童生徒、教師とともに未来を語る時間をつくっていきたいと考えながら、3年間のインドでの生活が始まった。

## 2. 1年目 インドのプログラミング学習との出会い

調査・研究計画に則り、5月には教育関係の状況を近隣の印日協会、インド現地校 IIT（インド現地 Kendriya Vidyalaya IIT Powei：以後 IIT とする）スクールを訪問した。印日協会では、日本に憧れをもっているインド人が多く、その興味関心が高いものがアニメであることを知った。IT関連企業においても、アニメ業界に関わる業務を望む者が多数いるとのことであった。インドでは、多くの人々が暮らしているが、貧富の差は明確である。カーブが廃止されたといってもそれは政治上のことであり、人々の日常にはその考えは根強く残っている。従って豊かな暮らしを望む者は、人よりも学び、遅く生きていかなければならない。そんなインドで重要視されているのが、教育の世界ではITにつながる学び、さらには言語学習であると言えるだろう。

Sony インディアにおいては、最先端技術、特にバーチャルリアリティの実現に向けて、インド人の技術者と日本のマネージャーの協力体制が敷かれていた。この分野においても、もはやインドは先進国と言っても過言ではない技術を身に付けていることが感じられた。さらにその力を海外で発揮するために、日本語を中心とした企業内スクールが従業員に向けて行われていることが印象的であった。さらにトヨタキルロスカ（インドにおいてトヨタが展開する合併企業）においても、その広大な敷地内に立派なスクールが存在し、企業発展ひいてはインドの発展のための教育がなされていることには驚きを覚えたところである。このような背景を受け、今、日本の教育において一躍脚光を浴びているプログラミング学習についてここインドではどのような展開がなされているのかを調べる

こととした。

IIT スクールには5月の訪問だけでなく、年間を通じて4度の交流（児童生徒の交流がこのうち2度）を行うことができた。初めは日本とインドの学校運営、児童生徒の実態の違いが中心であったが、後半にはカリキュラム内容についての意見交換をすることができた。インドにおいては、州ごとに違いはあるものの、国が教育の牽引を行っている。プログラミング学習についてもナショナルカリキュラムはなく、選択科目として存在しているのだが、日本との大きな違いは児童生徒の年代に応じたカリキュラムが存在し、2000年より指導が行われている。ムンバイは確認できていないが、デリー現地校では3年生から導入されている。基準教科書もあり、これは無償で配布される。その内容を見てみると

○3～8年生・デジタルリテラシーとプログラミングを学習 ○6～7年生・簡単な数値計算結果を画面に表示する  
○8年生・Web コンテンツ、計算機アプリケーションの作成 ○9～10年生・エクセルによる計算結果からチャートの作成 ○11～12年生・各自によるプログラミング

と、系統立てられ、非常に実践的な内容になっていることが分かった。そしてこれは、数学の一部として扱われている。つまり、17年前からインドにおいては系統立てた指導が行われているわけである。なぜインドが日本よりも先行して行われているのか、それはやはりその国家のおかれた位置にも関係しているのであろう。先にも述べたが、インドでは余りにも多くの人間が暮らしているため、そこで生きていくため、裕福な暮らしをするためには、各自が競争力をもたなければならない。つまり生きるために必要なことになるわけである。各企業も、このような人材を求めているわけであるから、自然とこの教育体系が教育課程に反映されてきているのではないだろうか。また、インドの教育の強みは数学である。この強みをさらに生かし高めるために教科の中に取り入れているのだと考える。

これらの事柄を踏まえた上で、私たちは日本の教育との比較を交えながら、今後共に生きていくためにはどんな力が必要であるかを考えていかなければならない。今後完全実施となる日本の新学習指導要領の方針ともすり合わせていくためにもプログラミング学習についての知識をもつ必要があるであろう。振り返ってみると、日本ではまだまだ本当の意味でのプログラミング教育の必要感は感じられていないのではないだろうか。ただ、今後インドを含め、グローバルな活動をしていけばいくほど日本の子どもたちは、そのような国々の人々と渡り合っていかなければならないのである。そこで私が感じることは、まずなぜ日本において、このプログラミング学習に光が強くて当てられてきたのかを、指導する教職員がよく理解することが大切なのだということである。そしてそれを取り入れていく段階においては、単発ではなく、いかに効率よくカリキュラムの中に取り込み、つけさせたい力を明確にして教材を選定、作成していくのか、それが今後深められていくのではないかと考える。ムンバイ日本人学校においても、同じことが求められている。そこで、学校としての研究で、2018年度以降はこのプログラミング学習について、さらに実践的な学びを進めていくこととした。その内容を踏まえつつ、学校教育において今後何が大切なのか、児童生徒に求められる力とは何なのかを探り、その内容を実際の教育現場において実践、検証していくことを教職員で確認した。

### 3. 2年目 自らの思いを発信する子どもたち

4月、2017年度も多く交流させていただいたIITスクール（インド現地校）のスピーチ表彰式に招待された。インドの学校において、多くがこういったスピーチ大会を通年実施し、そこで優秀な成績を残した児童生徒は、大々的に表彰されることがよく見られる。中にはスクールバスに優秀な児童生徒の写真入ポスターを貼り出し、運行している学校もある。インドでは日本とは異なり、小さい頃からアウトプットを重視し、子ども達もその中でプレゼンテーション能力を当然のように身につけていく。はっきりしているのは学校としての方向性、児童生徒に身につけさせたい力が明確であるということだ。こういった学校全体で取り組んでいる内容があるということは、日本で

は特色という言葉で言い表されているが、具体的な姿を提示していくことは難しく、日本の各校ともに悩んでいる部分であろう。在外教育施設である本校は、日本にある学校と全く違う環境におかれ、子ども達は否が応でもグローバルズムを身につけなければならない。そんな学習環境においての拠所として ESD の視点を学校運営に採り入れてきている。はじめは半信半疑だった教員も、持続可能な未来を担う目の前の子ども達を見るときに、いままで気づかなかった視点を採り入れ、多角的に評価し、声かけをするようになってきている。子ども達自身も、これまでの自分を振り返り、変わっていくことが今必要とされていることを意識し始めている。

9月には、そんな子ども達の変容の様子を、南西アジア・中東・アフリカ地区の日本人学校、補習校の校長先生方に見ていただく機会を得た。子ども達は普段通りの授業を行い、自分たちの身につけた力を自然体で校長先生方に伝えることができた。その中で子ども達は、自ら積極的に各校長先生方に対し接している姿も見られた。これは、自己変容の一つの姿であると感じている。インドではスピーチというスキルを身につけることが重要視されるが、日本人学校の子ども達はそもそもその育ちが違うわけであるから、必ずしもそのアプローチが効果的であるとは考えられない。もっと精神的な部分での変容が、もしかしたらこの子たちには合っているのではないかと改めて感じた時であった。

その後 12 月のユネスコ横浜大会、ESD 全国大会に参加し、ユネスコスクール参加の意思をお伝えしたが、インドではその受付窓口がなく、残念ながら今回は見送られることとなってしまった。大会においては、日本全国の様々な取り組みが発表され、学校として、個人としていかに地球の未来に向けて自分たちが出来る事は何か、ということをお伝えした。この精神と、実践の素晴らしさを本校に持ち帰り、教員と共有したことは言うまでもない。ただやはり今後もこの方向性を重視し進めていくためには、ESD、さらには SDGs（持続可能な開発目標）について、皆で考え、日々の教育活動に反映させていくべきであると強く感じた。

そこで、1月、海外子女教育財団の支援も仰ぎながら、聖心女子大学の永田教授と横浜市立日枝小学校の住田校長のお2人を講師として本校に招請し、児童生徒の姿を見ていただくとともに、教員研修を実施した。お2人からは、本校の日々の取り組みが、教師そして子ども達の変容に繋がっていることを評価していただき、今後本校が進むべき方向性を示していただいた。

#### 4. 3年目 子どもたちの成長に寄与する学校運営

2017 年度はインド国内の教育現場の状況を把握することにより、その良さをいかに本校の教育に反映できるかを考えてきた。その中で、インドでは現在日本でも盛んに取り上げられているプログラミング学習が既に公的カリキュラムの中に含まれ（算数・数学）自然な形で公立校では学習が展開されていることを知った。この学習は独立した学習としてではなく、様々な場面において学びが行われることが望ましい。インドのカリキュラムへの落としこみ方法は、教科をある程度限定しているが、非常に参考となるものである。しかしながら、今回日本で提唱され、企業も力を入れ始めているこの内容は、IT の活用という側面ももったものとなっている。そうなるとうちでも理論だけでなく、スキルの習得が必要となってくる。そこで 2018 年度には、実際にコンピューターを基本とした IT 機器の活用を含んだ学習が展開できるよう、カリキュラムづくりと教材の準備を行った。（2018 年度より「ムンバイタイム」として週 1 時間、全学年で実施）海外の状況を見てみると、論理的思考をベースに自らの考えをアピールし、多くの人を巻き込みながら実現していく、という姿が、小学生年代から見られることに驚かされた。グローバルな観点からも、日本人も今後このような力を身につけることが、世界中の人と対等に良好な関係を築くことに繋がっていくであろうと考えた。

2 年目には、この経験から、これまで以上に現地校との交流を深め、その子どもたちが身につけている力とは何かを知りたいと思い、積極的に交流を行ってきた。子ども同士の交流の中においては、言語や遊び、食事等、日々の生活の中に息づいた文化を互いに伝え合うことで、理解しあうことから始まった。この「互いに伝え合う」とい

うことの重要性は、純粋な子どもたちの交流の姿を見ている中で、大きな力になることを感じた。日本人はどうしても自分たちと異なるグループに対してはつい壁をつくってしまう傾向が見られる。しかしながら、これでは相手を理解するどころか、かえって色眼鏡で見えてしまいかねない。日本人学校の特に低学年の子どもたちは、はじめはとまどいながらも、相手の積極的なアプローチにより徐々に距離感を縮めることができ、何回かの交流の後には、相手を大切にしたいという思いが強くなったことが感じられた。明確にコミュニケーション能力の育成を目指して、日々の教育活動の中に、あらかじめその要素を組み込んでいくことにより、すべての子どもたちのベースアップを実現できるということは、日本の教育課程編成においても大いに参考にすべきところであると感じた。しかしながら、日本語は表意文字であり、アルファベットを使用する表音文字を言語とする国々とは、そのアプローチの仕方が異なることになるとも感じている。日本語の良さを大切にすること、それはとりもなおさず日本という国を愛することに繋がる重要な学びである。しかしながらグローバルな観点から言えば、日本語を英語に訳して相手と対話するのではなく、英語そのもので理解し対話していく力がこれからは必要なだろう。つまり、日本語脳と英語脳、この2つを育てていく教育が、これから日本人が持続的に海外で活躍していくために必要なことであろうと感じたところである。

そして3年目の本年度は、これまでに知ったインドという国、そしてインドの学校、さらにはインドと日本の関係について、いかに教育課程の中に落とし込んでいくのか、本校のカリキュラム全体の見直しを図ってきた。日本人学校は、日本の教育課程に則り教育計画が運営されているため、教科的には自由に行える部分は限られている。そこで、1,2年生の生活科、3~6年生、中学部の総合的な学習の時間に着目し、その中でESDの意識をもつこと、プレゼンテーション能力の育成を図ることとした。本校は例年10~11月、全校児童生徒による学習発表会を、ムンバイに暮らす日本人の方々、本校と交流のあるインド人の方々をご招待して行っている。この場を活動の頂点とし、上記の意図の達成を検証する。1年目の生活科、総合的な学習の時間の発表内容は、各学年でねらいはあるものの、それぞれが独立したものであり、全体としてのテーマ、目標が見られなかった。そこで2年目からは教師から意図的に、持続していくためには、というなげかけを行うことにより、未来志向の発表としてきた。そして本年度、それぞれの学年が発表テーマとしたものは1~2年「現地交流」、3~4年「環境維持」、5~6年「文化遺産」、中学部「選挙制度」であった。他学年との重複がないように年度始めに調整はされたが、そこからは子どもたちと教師は、発表の日をゴールとして、日々の学校生活の中で積極的に取り組んできた。見て分かるように、どのテーマもSDGsが提唱するゴールに結びつく内容である。これにより、教育課程のなかに、自然ながらも意図的にESDの意識を高める活動が組み込まれていった。また、今後の日本人が身につけ高めるべき資質の1つであるプレゼンテーション能力、それを実際に大きな舞台で行うことを前提に学習できたことは、大変意義のあることだったと感じている。当日の各学年の発表は、単に調べたことを伝えるのではなく、自分の目で見、手で触れ、実際に聞いたことを発表したことにより、発表会に参加された方々（保護者、日本人会、現地での交流のあるインドの方々）から、非常に高い評価を得ることができた。何よりも、その発表会后、日々の生活の中での学びから得た知識をもとに活動が個々に継続されていることから、本年度のこの活動により児童生徒の資質が大きく向上したことを表していると感じている。

インドで行われているように、身につけたい資質を明確にし、1つのゴールを学校全体で目指していく、今回はそれに近い取り組みとなったが、その目的を指導者そして児童生徒がしっかりと理解し把握していれば、非常に効果的な学習の場となることがわかった3年間であった。この経験を、今後の自分のおかれる環境に即して変化を与え、実践していきたい。そしてそのことにより、1人でも多くのグローバル人材を育成できたらと考えている。